

令和5年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和5年7月28日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表は令和5年8月29日の予定です。</p> <p>◇農作物病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇農薬の再評価制度等により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>穂いもちの発生量は多いと予想されます。葉いもちの発生が確認されるほ場では、7月26日発表の注意報第1号を参照して直ちに薬剤防除を実施してください。</p> <p>斑点米カメムシ類の発生量は多いと予想されます。7月28日発表の防除対策情報第11号を参照して防除を実施してください。</p>
大 豆	<p>紫斑病の発生量は平年並と予想されます。開花期20～30日後の薬剤防除を実施してください。</p> <p>ウコンノメイガの発生量は多いと予想されます。要防除水準を超えたほ場では、7月28日発表の防除対策情報第12号を参照して薬剤防除を実施してください。</p>
野 菜	<p>病害では、ねぎ（夏どり、秋冬どり）の黒斑病・葉枯病、きゅうりのべと病、炭疽病が多いと予想されますので薬剤防除に努めてください。</p> <p>害虫では、えだまめのダイズサヤタマバエが多いと予想されます。7月28日発表の防除対策情報第14号を参照して防除を実施してください。ねぎ（夏どり）のネギハモグリバエが多い、ねぎ（秋冬どり）、トマトのアザミウマ類、えだまめの食葉性鱗翅目幼虫がやや多いと予想されますので防除を実施してください。</p>
果 樹	<p>りんごとなしでは、ナミハダニの発生が多いと予想されます。殺ダニ剤の使用回数に注意し、薬剤防除に努めてください。</p> <p>ぶどうでは、灰色かび病が多いと予想されます。発病部位を速やかに摘み取り、適切に処分してください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	穂いもち	全県	やや早い	—	多い
	紋枯病	全県	—	やや多い	やや多い
	ごま葉枯病	全県	—	平年並	平年並
	セジロウンカ (第2世代幼虫)	全県	—	多い	多い
	斑点米カメムシ類(第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	やや早い やや早い	多い 平年並	多い やや多い
大 豆	紫斑病(子実)	全県	やや早い	—	平年並
	アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	全県	やや早い やや早い	やや少ない 平年並	少ない やや多い
	吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	全県	早い	平年並	やや多い
	ウコンノメイガ	全県	—	多い	多い
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	平年並
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	平年並
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	多い	多い
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	やや多い
	ねぎ (夏どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	多い
アザミウマ類 (ネギアザミウマ)		全県	—	少ない	やや少ない
ネギハモグリバエ		全県	—	多い	多い
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	多い	多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	平年並	やや多い
きゅうり	べと病	全県	—	多い	多い
	うどんこ病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	褐斑病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	斑点細菌病	全県	—	少ない	少ない
	炭疽病	全県	—	多い	多い
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	少ない	平年並
トマト	灰色かび病	全県	—	平年並	平年並
	葉かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	すすかび病	全県	—	—	平年並
	うどんこ病	全県	—	—	平年並
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	やや多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	多い	やや多い
	黒星病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	やや多い	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや多い	やや多い
	ナミハダニ	全県	—	やや多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	多い	多い
	果樹カメムシ類	全県	—	やや多い	やや多い
	キンモンホソガ (第3世代)	全県	早い	多い	多い
なし	黒星病	県北部・県中央部	—	多い	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	多い	多い
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	やや少ない	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	やや多い
	灰色かび病	県南部	—	多い	多い
	晩腐病	県南部	やや早い	—	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 穂いもち	やや早い (前年よりやや早い)	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (－/±)。

イ、7月20日発表の作況ニュース第6号によると、稲の生育は平年並からやや早いと予想されている (－/)。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は3.0% (平年2.4%)、同地点率は12.5% (平年13.6%) といずれも平年並だった。穂いもちの伝染源となる上位2葉の葉いもち発病株率は0.7% (平年0.1%) と高く、同地点率は3.8% (平年2.1%) でやや高かった (/ +)。

エ、BLASTAM (アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム) において、7月17～20日に連続した感染好適日が全県的に出現している (/ +)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、葉いもちの確認されるほ場では、7月26日発表の注意報第1号を参照して直ちに防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月25日に各地域振興局が行った水稻定点調査によると、あきたこまちの茎数は448本/m²（平年比91%）で少なかった（ /-）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における発病株率は2.4%（平年1.6%）でやや高く、発病地点率は18.8%（平年14.0%）で平年並だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. セジロウンカ （第2世代）	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場（80地点）における本田のすくい取り調査の成幼虫数は5.7頭（平年0.9頭）で多く、発生地点率は76.3%（平年19.7%）で高かった（ /+）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場（30地点）の払い落とし調査（粘着板法四株叩き式）における10株当たり幼虫数は7.2頭（平年6.2頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、出穂期10日後頃にアルバリン／スタークル剤により斑点米カメムシ類の防除を実施した場合は、本虫を対象とした薬剤防除の必要はない。ただし、キラップ剤はセジロウンカ、ヒメトビウンカに効果が劣るため薬剤選択に注意する。

イ、今後、さらに発生量が増加する可能性があるため、ほ場の観察に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. 斑点米カメムシ類 （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ） （第2世代成虫）	やや早い（前年並） やや早い（前年並）	多い（前年より多い） やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における畦畔でのアカスジカスミカメ（以下、アカスジ）のす

くい取り数は6.6頭（平年2.6頭）で多く、発生地点率は20.0%（平年19.2%）で平年並だった（ /+）。アカヒゲホソミドリカスミカメ（以下、アカヒゲ）のすくい取り数は1.7頭（平年2.4頭）、発生地点率は30.0%（平年29.4%）でいずれも平年並だった（ /±）。

水田内でのアカスジのすくい取り数は0.2頭（平年0.4頭）でやや少なく、発生地点率は8.8%（平年9.4%）で平年並だった（ /±）。アカヒゲのすくい取り頭数は0.2頭（平年0.2頭）、発生地点率は8.8%（平年10.6%）でいずれも平年並だった（ /±）。

ウ、各予察灯（県内6地点）における7月1～4半旬の総誘殺数はアカスジが29.2頭（平年26.7頭）、アカヒゲが136.2頭（平年122.2頭）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月28日発表の防除対策情報第11号を参照する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ごま葉枯病	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
ニカメイガ （2回発生地帯の 第2世代）	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0.05%（平年0.06%）で平年並だった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0%（平年0.1%）で平年並だった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月4半旬まで飛来は確認されていない。また、7月4～5半旬の抽出ほ場調査でも発生は確認されなかった。
ヒメトビウンカ	—	多い	多い	7月4～5半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り成幼虫数は0.8頭（平年0.1頭）が多かった。斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ （第3世代）	—	やや少ない	やや少ない	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0%（平年8.0%）でやや低かった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ	—	—	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 紫斑病 (子実)	やや早い (-)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月20日発表の作況ニュース第6号によると、大豆の生育が早まっており、開花期が早まると予想される (-/)。

ウ、前年収穫期の被害粒率は平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花期20～30日後にジマンダイセン水和剤 (RACコード:M3)、ペンコゼブ水和剤 (同:M3)、トライフロアブル (同:U16)、ニマイバー水和剤 (同:10・1)、プランダム乳剤25 (同:3)、Zボルドー (同:M1)、Zボルドー粉剤DL (同:M1) のいずれかで防除する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

イ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

エ、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する (収穫45日前まで)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期 (発 生 盛 期)	発 生 量
2. アブラムシ類 (ジャガモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	やや早い (-)	少ない (前年より少ない)
	やや早い (-)	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (ジャガイモヒゲナガアブラムシ (-/-)、ダイズアブラムシ (-/+))。

イ、秋田市予察ほにおける7月5半旬の発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0% (平年2.4%) でやや低い (/-)、ダイズアブラムシが0% (平年3.3%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	早い (前年並)	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (-/+)

イ、各予察灯 (6地点) における7月4半旬までの総誘殺数は1.0頭 (平年0.4頭) で平年並だった (/±)。

ウ、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける成虫初確認時期は、7月1半旬 (平年7月2半旬) で早く、7月1～5半旬までの総誘殺数は12.0頭 (平年11.5頭) で平年並だった (-/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アグロスリン乳剤又はパーマチオン水和剤でマメシンクイガとの同時防除に努める。

イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. ウコンノメイガ	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、7月下旬の大豆巡回調査(16地点)における叩き出し成虫数は1.0頭(平成0.7頭)でやや多く、茎当たり卵塊数は0個(平成0.05個)でやや少なく、葉巻発生株率は27.0%(平成6.6%)、葉巻発生地点率は100%(平成48.4%)でいずれも高かった。また、県南部において要防除水準に達している地点が確認された(/+)。

イ、各予察灯(6地点)における7月1～4半旬までの総誘殺数は22頭(平成6.6頭)で多かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月28日発表の防除対策情報第12号を参照する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. フタスジヒメハムシ	—	平成並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている(/+)。

イ、前年の収穫期の被害粒率から越冬量はやや少ないと推定される(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシンクイガとの同時防除に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. マメシンクイガ	平成並(前年並)	平成並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい(±/)。

イ、前年収穫期の被害粒率から越冬量は平成並と推定される(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により発生密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は、8月下旬～9月上旬に1回散布する。

② トレボン剤、プレバソフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。ただし、前年多発しているほ場では、2回散布する。

③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル5を9月上旬に2回散布する。

イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ダイズサヤタマバエ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における被害率は0.4%（平年0.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤などで防除する。

イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における発生率は1.3%（平年2.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかで防除する。

イ、老齢期になると薬剤の効果が劣るので、若齢期に防除する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病率は13.3%（平年5.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、適正な肥培管理を行う。

イ、両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。なお、収穫時期が近い場合は、使用時期や総使用回数に注意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は2週間以上確保する。

ウ、さび病などの発病や害虫による食害は、本病の発生を助長するため、他の病害虫の防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月後半の巡回調査における食害株率は13.8%（平年24.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）等を茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロソソ粒剤（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月後半の巡回調査における食害株率は18.1%（平年8.3%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターSE（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）等を茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロソソ粒剤（同：28）、ミネクトデュオ（同：28・4A）粒剤を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

D ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は9.4%（平成1.3%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ /+）。

イ、7月後半の巡回調査における食害株率は14.2%（平成15.2%）で平成並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ネギハモグリバエ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ /+）。

イ、7月後半の巡回調査における食害株率は9.0%（平成6.5%）で平成並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ（夏どり）に準じる。

4. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	やや少ない	平成並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

E きゅうり

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平成並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は32.5%（平成16.3%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月18日発行の防除対策情報第8号を参照して防除する。

病虫害名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシシナ水和水剤（同：19）、ポリベリン水和水剤（同：19・M7）等の薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病虫害名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和水剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和水剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ、ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病虫害名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点細菌病	—	少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は1.9%（平年7.1%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過剰施肥をしない。また、過繁茂による通風しの不良を改善する。

イ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、銅水和水剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 炭疽病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月後半の巡回調査における発病株率は5.0%（平年1.6%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、ジマンダイセン水和剤等の銅水和剤による予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

ウ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月後半の巡回調査における発生株率は1.9%（平年8.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場周辺の除草を徹底する。

イ、ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

ウ、定期的に、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、コルト顆粒水和剤（同：9B）等を茎葉散布する。

エ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ワタヘリクロノメイガ	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は1.1%（平年2.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ロブラール水和剤（同：2）、ベルクート水和剤（同：M7）などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 葉かび病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年6.6%）でやや低かった（/—）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（同：M5）、ベルクート水和剤（同：M7）などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. すすかび病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（前年0%）だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、潜伏期間が2週間と長いので、発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などで予防散布に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：10・1）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）を散布する。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. うどんこ病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（前年0%）だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ、発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などで予防散布に努める。発病が確認されたらパンチョTF顆粒水和剤（同：3・U16）、ラミック顆粒水和剤（同：50・M7）を散布する。
- ウ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、50の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、北秋田市防除適期決定ほにおける7月3～4半月の青色粘着板への誘殺数は391頭（平年405.4頭）で平年並だった（ /±）。
- ウ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ、ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、マッチ乳剤（同：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ワタアブラムシ) (モモアブラムシ)	—	平年並	平年並	

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は1.3%（平年2.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。
- イ、ウコンノメイガの発生が多い場合は、フェニックスフロアブル等で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ダイズサヤタマバエ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害率は0.4%（平年0.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月28日発表の防除対策情報第14号を参照する。

H 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. オオタバコガ	—	やや多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）
- イ、防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半月のフェロモントラップへの総誘殺数は1頭（平年1.7頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害痕の近くには幼虫が潜んでいるので、注意深く観察し捕殺する。
- イ、初期被害の早期発見に努め、若齢幼虫期に薬剤で防除する。

I りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病率は3.8%（平年1.8%）で高く、発病地点率は75.0%（平年72.7%）で平年並だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）のいずれかを保護殺菌剤（ダイパワー水和剤、オーソサイド水和剤80等）に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。
- エ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率は2.1%（平年2.6%）、発病果率は0.1%（平年0.2%）、発病地点率は15.0%（平年15.6%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、黒星病の発生園では、QoI剤（RACコード：11）の使用を中止し、保護殺菌剤（ダイパワー水和剤、オーソサイド水和剤80等）を10日間隔で散布する。

エ、未発生園では、QoI剤の使用が可能であるが、必ず保護殺菌剤に加用する。また、耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

オ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。

イ、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

オ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 輪紋病	－	平年並（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペースト（RACコード：1）を塗布する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

エ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.2%（平年0.0%）でやや高く、発病地点率は5.0%（平年0.9%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤（RACコード：1）又はベンレート水和剤（同：1）を保護殺菌剤（ダイパワー水和剤、オーソサイド水和剤80等）に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1～2回の使用とするが、両剤の効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）を保護殺菌剤に加用して散布する。

ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

エ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほ（7地点）における6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの平均誘殺数は63.1頭（平年60.8頭）で平年並だった（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.02%（平年0.07%）で平年並、被害地点率は5.0%（平年1.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は速やかに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は0.5頭（平年0.7頭）で平年並、発生地点率は65.0%（平年51.4%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、1葉平均成幼虫数が3頭に達した樹が全体の10%になった頃に殺ダニ剤を散布する。

イ、コロマイト乳剤（RACコード：6）は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高

温時には使用しない。また、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40との混用でも、薬害（葉の黄変、葉裏の褐変）を発生させるおそれがあるので使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点
が同一の剤は年1回までの使用とする。

エ、ダニオーテフロアブル（RACコード：33）を使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、
銅剤（銅を含む製剤）を使用しない。

オ、エコマイト顆粒水和剤（RACコード：23）の適用作物はりんごとおとうのみなので、これ
ら以外の果樹類に薬液がかからないようにする。また、ダニゲッターフロアブルは、同一RAC
コードのため注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.1頭（平年0.0頭）で多く、発生地点率は
30.0%（平年6.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、「7. ナミハダニ」の項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ）	—	やや多い （前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.2%（平年0.1%）でやや高く、被害地点率は20.0%
（平年18.2%）で平年並だった（ /±）。

ウ、防除適期決定ほ（7地点）における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラッ
プへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は18.6頭（平年16.6頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況を良く観
察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ（第3世代）	早い（—）	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、果樹試験場（横手市）の予察ほにおける第2世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛半旬は、7月3半旬（平年7月5半旬）で早かった（- / ）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害葉率は0.6%（平年0.2%）、被害地点率は35.0%（平年20.5%）でいずれも高かった（ / + ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、バリアード顆粒水和剤又はモスピラン顆粒水溶剤などのネオニコチノイド剤を使用する。

イ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

11. その他病害虫の発生予報と防除上注意すべき事項

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴヨカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J なし（日本なし）

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の降水量はかなり多く（ / + ）、7月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.4%（平年0.1%）で高かった（ / + ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を7日とする。

ウ、スピードスプレーヤーで防除する場合は、全列を走行して丁寧に散布する。薬液のかかっている部分に対しては、当日中に手がけで補正散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ± ）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は4.0%（平年4.8%）で平年並だった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲、二十世紀で発病が多い。

イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）を主剤に加用するか、ポリキ
ャプタン水和剤（同：19・M4）を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシ
ン剤の使用は年間3回以内とする。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3. 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は削り取り、トップジンM
ペーストを塗布する（塗布は年3回以内）。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。高温、多雨の場合は散布間隔を7日とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（/±）。

イ、防除適期決定ほ（4地点）における6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの平均誘
殺数は39.3頭（平年23.4頭）で平年並だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布
しない（葉裏に黒色斑）。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. ナミハダニ	—	多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（/+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.2頭（平年0.0頭）で多く、発生地点率は
60.0%（平年18.7%）で高かった（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、ただちに殺ダニ剤を散布する。ただし、コロマイト水和剤は薬害（黄変
落葉）が発生するおそれがあるので高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同
一の剤は年間1回使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0.1%) でやや低かった (/-)。

ウ、防除適期決定ほ (4地点) における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへのカメムシ類の平均誘殺数は47.8頭 (平年20.0頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかで防除する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	平年並	平年並	ナミハダニとの同時防除に努める。
ハマキムシ類 (リンゴヨクモシ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

K ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. べと病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0% (平年0%) 、発病房率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

ウ、横手市予察ほ (品種：巨峰) における初発は、7月11日 (平年7月22日) で早く、7月下旬の発病葉率は16.6% (平年4.1%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、袋かけ以降の散布薬剤は、コサイド3000 (R A Cコード：M1) 、ホライズンドライフロアブル (同：27・11) 、ボルドー剤 (同：M1) のいずれかとする。なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。

イ、ホライズンドライフロアブルの使用は、耐性菌の出現を回避するため年間1回とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	－	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は1.1%（平年0.1%）、発病果房率は0.7%（平年0.2%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉や発病果房は速やかに摘み取り、焼却するなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	やや早い（－）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、ぶどうの成熟期は早いと見込まれる（－/ ）。

ウ、開花前の巡回調査における発病果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は速やかに摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率は0%（平年0.0%）で平年並だった（ /±）。

ウ、防除適期決定ほ2地点における7月1～3半旬の黄色粘着板への総誘殺数は0頭（平年13.1頭）でやや少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年被害の多い園地では袋かけ以降にエクシレルSE又は合成ピレスロイド剤で防除する。
なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。

イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間2回以内とする。

IV. 気象予報

令和5年7月27日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月29日～8月28日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

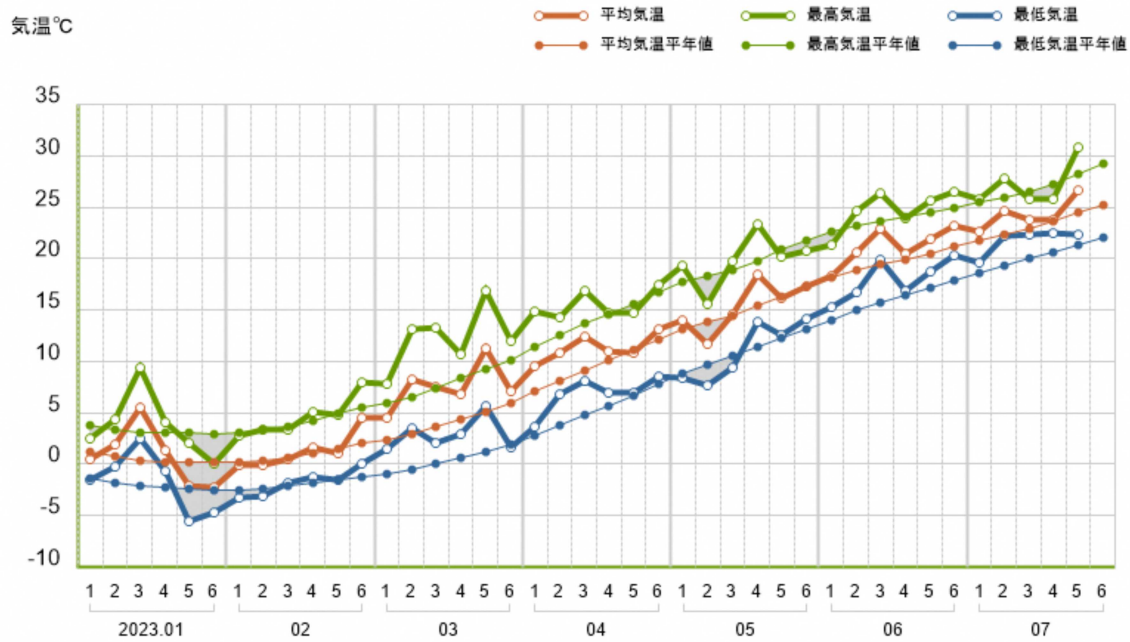
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

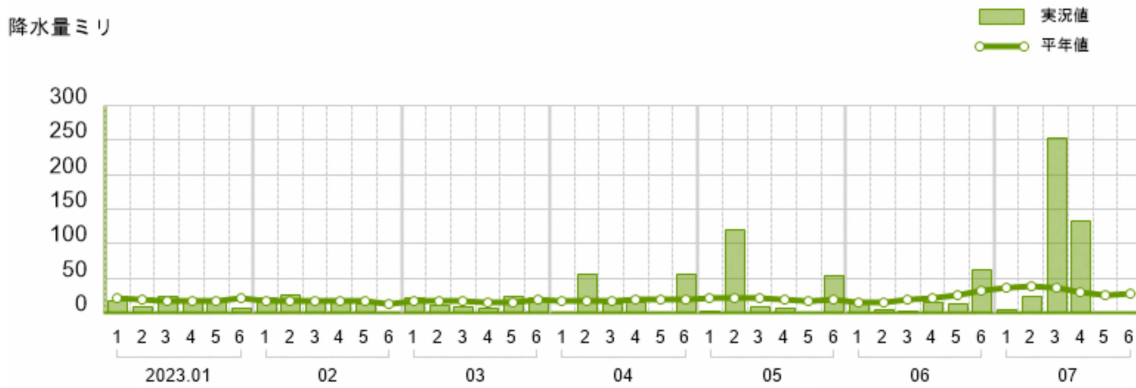
	低い	平年並	高い
7/29～8/4（1週目）	10%	10%	80%
8/5～8/11（2週目）	10%	30%	60%
8/12～8/25（3～4週目）	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

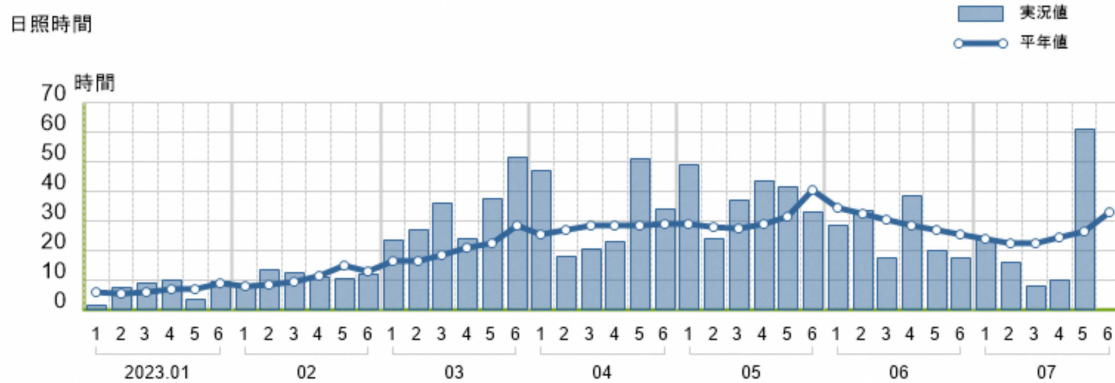
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和5年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

周りに配慮して 飛散を防止

守ろう
農薬ラベル
確かめよう
周囲の状況

周囲の状況を踏まえて
使う農薬や使い方を考えよう

周りに影響が少ない
天候や時間帯に行おう

散布機器の機能や性能を
理解し、正しく使おう

十分な時間の余裕をもって
幅広く周知しよう

農薬散布のお知らせ

〇〇年〇月〇日 〇時～〇時
場所〇〇〇〇 目的〇〇〇〇
農薬名〇〇〇 連絡先〇〇〇

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/

農薬の適正使用 農林水産省

検索



詳しくは
こちら

令和5年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催